

テーマ展「龍—天翔る靈獸—」展示作品リスト

番号	名称	数量	時代	所蔵
龍という靈獸				
1	説文解字 許慎著	8冊の内1冊	成立：中国・後漢時代 刊行：中国・北宋時代	当館（井伊家伝来典籍）
2	印章「龍翔景雲」、印章「龍騰豹変」	各1顆	江戸時代	当館（井伊家伝来資料）
3	雲龍図 狩野永章筆	1幅	江戸時代 文政11年（1828）	当館（數野美春氏寄贈資料）
4	湖東焼 染付雲龍図水屋壺	1口	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
5	仙人尽図 加藤湖川筆	2巻	江戸時代中期	当館（井伊家伝来資料）
6	能装束 紺地丸龍と風景文様側次	1領	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
雨を司る神 龍神				
7	今昔物語	27冊の内1冊	成立：平安時代 書写：江戸時代	当館（井伊家伝来典籍）
8	能面 泥黒髭 甫閑満猶作	1面	江戸時代 享保12年（1727）	当館（井伊家伝来資料）
9	能小道具 龍戴	1頭	大正時代～昭和時代初期	当館（井伊家伝来資料）
10	能装束 紅黒段替毘沙門亀甲稻妻雲龍波丸文様厚板	1領	大正時代～昭和時代初期	当館（井伊家伝来資料）
11	短刀 銘山城国西陣住人埋忠明寿	1口	桃山時代	当館（井伊家伝来資料）
特異な姿の龍				
12	湖東焼 赤絵金彩翹龍図小皿 自然齋作	5口	江戸時代後期～明治時代	個人
13	能装束 紫地稻妻と雲応龍文様袷法被	1領	大正時代～昭和時代初期	当館（井伊家伝来資料）
14	能装束 萌葱地雨龍文様半切	1腰	江戸時代 文化5年（1808）	当館（井伊家伝来資料）
多彩な龍の意匠				
15	伊万里焼 染付龍波濤図輪花小皿	5口	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
16	万古焼 青磁龍図橋杭花生	1口	江戸時代中期	当館（井伊家伝来資料）
17	黒漆塗井桁に橘紋雲龍蒔絵籠	1腰	江戸時代中期	当館（井伊家伝来資料）
18	龍文竹矢筒	1腰	江戸時代中期	当館（井伊家伝来資料）
19	龍笛 銘羽龍丸	1管	江戸時代中期	当館（井伊家伝来資料）
20	能装束 紺地雲龍牡丹文様角帽子	1頭	江戸時代後期	当館（井伊家伝来資料）
21	双龍図鐺	2枚	江戸時代中期	当館（井伊家伝来資料）
22	能小道具 雲龍図唐団扇	1握	明治時代	当館（井伊家伝来資料）
23	富士に昇龍図 佐竹永海筆	1枚	江戸時代 文久2年（1862）	当館（青木巖氏寄贈資料）
24	龍に鯉図	対幅	江戸時代中期	個人
25	龍虎図	6曲1双	江戸時代中期	当館（井伊家伝来資料）

写真解説

1 雲龍図 狩野永章筆 1幅 (作品リストNO. 3)

縦 139.7cm 横 84.1cm

江戸時代 文政11年 (1828)

当館蔵 (數野美春氏寄贈資料)

渦巻く雲と龍を描いた大幅。初公開作品。

中国に起源を持つ^{れいじゆう}靈獸・龍は、次第に神格化が進む中で、複数の動物の優れた部分が融合した姿をしていると考えられるようになりました。漢時代(紀元前202年～紀元後8年)には、角は鹿、頭は駱駝^{らくだ}、胴は蛇、鱗は魚^{てのひら}、掌は虎、爪は鷹というように、9種類の動物にそれぞれ似る「九似」のイメージが定着しました。

また、紀元後100年頃に編纂された中国最古の字書『説文解字』^{せつもんかいじ}に、龍は春分に天に昇り秋分に水底に潜ると記されるように、天地を自在に行き来すると考えられたことから、雲の間を^{かけ}翔る姿が特に典型的な表現の一つとなりました。水墨画では、墨の濃淡や滲みを活かして、湧き立つ雲と勢いよく飛翔する龍を表現したものが多く見られます。

本図も典型的な龍の姿を表したもので、雨雲を思わせる雲の質感、その間を^{かけ}翔る龍の姿が墨の効果を活かして巧みに表現されています。作者の^{かのうえいしょう}狩野永章(1761～1830?)は、京都を拠点に活動した狩野派・^{きょうのの}京狩野の絵師。彦根藩御用絵師をつとめた^{えいがく}狩野永岳(1790～1867)の実父でもあります。



2 能面 泥黒髭 甫閑満猶作 1面 (作品リストNO. 8)

面長 20.2cm 面幅 14.7cm 面奥 8.7cm

江戸時代 享保12年 (1727)

当館蔵 (井伊家伝来資料)

中国において、雨を降らせる^{れいじゆう}靈獸・龍は仏教に取り入れられ、仏法を守護し降雨を司る神・龍王となりました。そして、日本古来の水の神と融合し、仏法を守護する、水底の竜宮に棲み雨や水を支配する神・龍神となり、雨乞いとも結びついて広く信仰を集めてきました。さまざまな説話や物語に龍神に関するエピソードが見られるほか、日本の伝統芸能である能にも強い霊力を持つ神として登場します。

この^{おもて}面は、能において龍神の役が用いる^{ちくぶしま}面で、「竹生島」や「春日龍神」などの演目で使用します。「黒髭」の名称は、眉毛や口髭が黒々と表されることに由来します。下顎を突き出したしゃくれた顔、眉間に力を込めて目を見開き、舌先が覗くほど大きく口を開いた表情が特徴です。この面のように全体を金泥彩色とするものは特に「泥黒髭」と称され、金泥の輝きがより一層、神秘的な印象を与えます。



3 ^{のうしょうぞく むらさき じいなずま くもおうりゅうもんようあわせはつ び} 能装束 紫地稲妻と雲応龍文様 袷法被 1領 (作品リストNO.13)

衿 108.0cm 丈 110.3cm

大正時代～昭和時代初期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

濃い紫の地に、四肢がなく胴が短い翼を持つ龍と、瑞祥の兆しである瑞雲、とげとげしい稲妻とを表した法被という能装束。法被は、龍神などの人智を超えた力を持つ鬼神の役で使用する装束です。

龍には、広く知られた龍のイメージとは異なる姿をした、様々な種類がいると考えられてきました。本作に表された四肢がなく翼を持つ龍は、^{おうりゅう} 応龍と称されます。中国において、龍は永い年を経ることで成長して姿を変えていくともいい、^{まむし} 応龍は、虺が1500年で成龍となった後さらに1000年を経た、嵐を起こす力を持つ特に格の高い龍とされます。

このように、神秘的な力を有する特別な存在とみなされた龍は、吉祥文様としても愛好され、さまざまな作品に表されてきました。染織品には瑞雲と組み合わせてさらに吉祥性を加えたものも多く見られ、本作では応龍の起こす嵐を連想させる稲妻も加えて表されています。



部分 (応龍)

4 ^{くろうるしぬり いげた たちばなもんうんりゅうまき え へびら} 黒漆塗井桁に 橘紋雲龍 蒔絵 籠 1腰 (作品リストNO.17)

総高 90.0cm

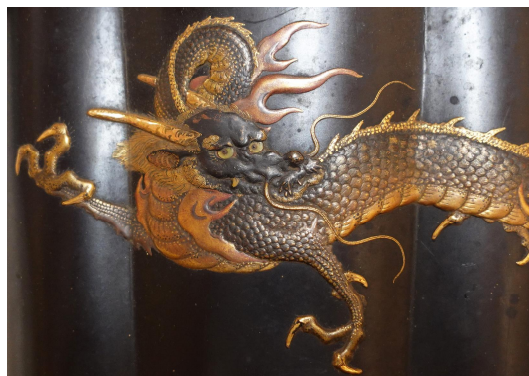
江戸時代中期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

黒漆塗に蒔絵で雲龍を表す籠。籠は矢を携行するための道具で、方立とよばれる箱形の部分に矢を入れ、腰に背負って使用します。強い霊力を持ち、雄々しい姿をした龍は武を本分とする武士に愛好され、武具の装飾に好んで用いられました。甲冑や弓具をはじめとするさまざまな作例に、多彩な龍の姿が見られます。

本作は方立の前面に井伊家の家紋・井桁紋に橘を組み合わせた紋と龍、背面に瑞雲を表します。上部に井桁紋を挟み込むように向かい合う2匹の龍、下部には1匹の横向きの龍が、それぞれ立体的に表され、蒔絵の技法を駆使して鱗の1枚1枚、鬚の1本1本まで実に細やかに表現されています。

この籠は附属する矢に「彦根中将」と記されることから、藩主の所用品であると考えられるものです。



部分 (方立下部の龍)

